

## 国内の畜産物の需給動向

# 牛肉

### 7年2月の牛肉生産量、わずかに減少

#### 生産量

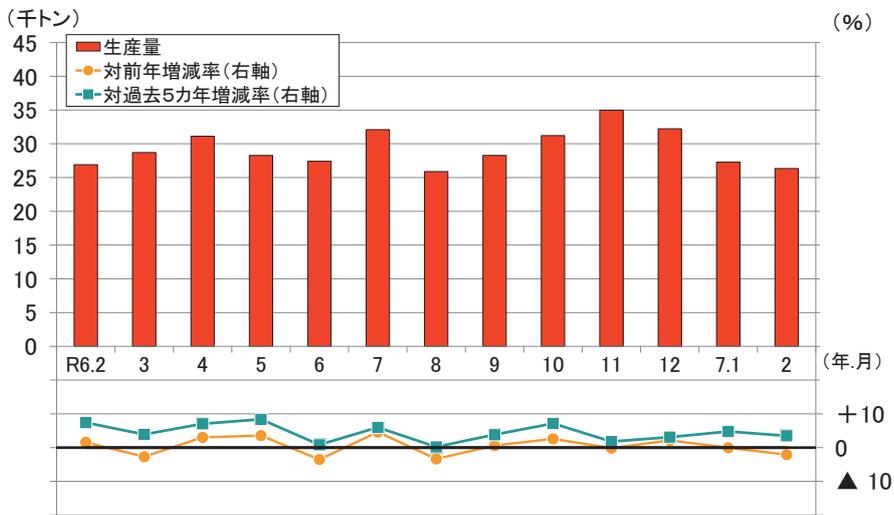
令和7年2月の牛肉生産量<sup>(注1)</sup>は、2万6345トン（前年同月比2.1%減）と前年同月をわずかに下回った（図1）。品種別では、和牛は1万3221トン（同2.5%増）と前年同月をわずかに上回った一方、交雑種は

7265トン（同0.0%減）と前年同月並み、乳用種は5821トン（同10.2%減）と前年同月をかなりの程度下回った。

なお、過去5カ年の2月の平均生産量との比較では、3.5%増とやや上回る結果となった。

（注1）生産量の合計は、その他の牛、子牛を含む。

図1 牛肉生産量の推移



資料：農林水産省「食肉流通統計」  
注：部分肉ベース。

#### 輸入量

2月の輸入量について、冷蔵品は、円安や現地価格の高止まりの影響などにより、主要国を含むほとんどの輸入先からの輸入量が減少したことなどから、1万1055トン（前年同月比11.6%減）と前年同月をかなり大き

く下回った（図2）。冷凍品は、輸入品在庫量が高水準であることなどにより、主要国のうち豪州を除くほとんどの輸入先からの輸入量が減少したことなどから、1万8292トン（同1.0%減）と前年同月をわずかに下回った（図3）。この結果、輸入量の合計<sup>(注2)</sup>でも、2万9353トン（同5.3%減）と前年同月を

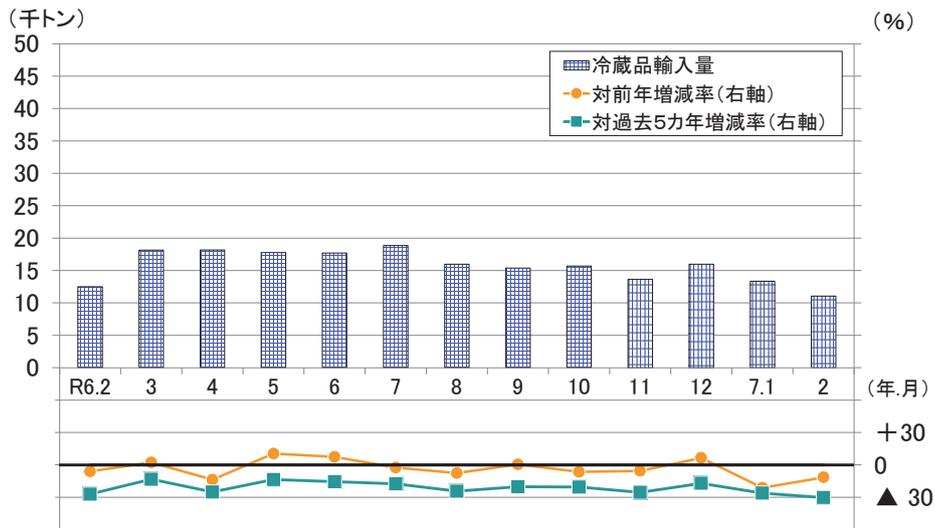
やや下回った。

下回る結果となった。

なお、過去5カ年の2月の平均輸入量との比較でも、冷蔵品は30.3%減と大幅に、冷凍品は14.1%減とかなり大きく、いずれも

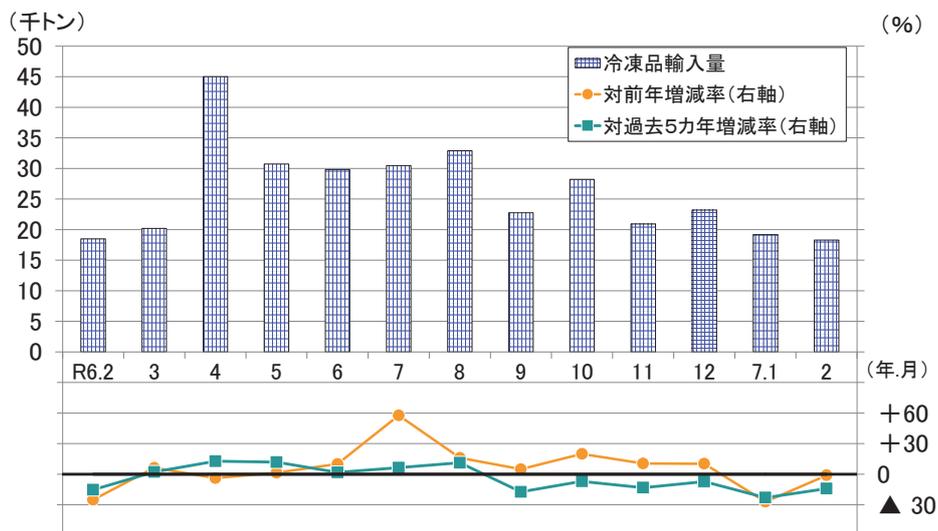
(注2) 輸入量の合計は、煮沸肉、ほほ肉、頭肉を含む。

図2 冷蔵牛肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」  
注：部分肉ベース。

図3 冷凍牛肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」  
注：部分肉ベース。

## 家計消費量等

2月の牛肉の家計消費量（全国1人当たり）<sup>(注3)</sup>は134グラム（前年同月比6.0%減）と前年同月をかなりの程度下回った（総務省「家計調査」）。

なお、過去5カ年の2月の平均消費量との比較でも、16.8%減と大幅に下回る結果となった。

2月の外食産業全体の売上高は、うるう年だった前年より営業日数が1日少なかったものの、販促キャンペーンや2月として過去最高となった訪日外客数、雨天日が少なかったこと、価格改定による客単価上昇などから、前年同月比6.0%増と前年同月をかなりの程度上回った（一般社団法人日本フードサービス協会「外食産業市場動向調査」）。このうち、食肉の取り扱いが多いとされる業態として、ハンバーガー店を含むファストフードの洋風は、ランチメニューの提供時間の延長やテレビ露出で、同4.8%増と前年同月をやや上回った。また、牛丼店を含むファストフードの和風は、これまでの価格改定や客数の増加

により、同11.4%増と前年同月をかなり大きく上回った。一方で、ファミリーレストランの焼き肉は、営業日数減の影響や価格改定による単価上昇で客数が減少し、同1.6%減と前年同月をわずかに下回った。

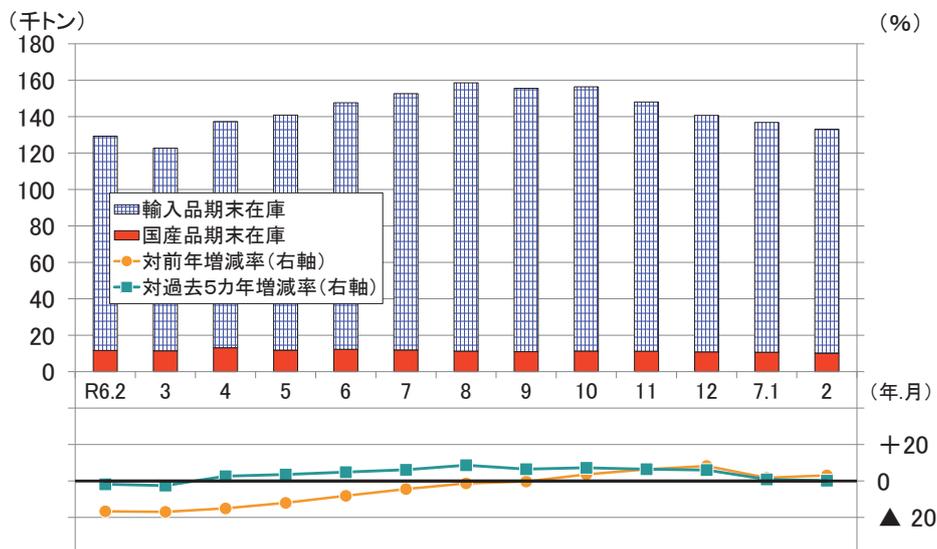
（注3）1世帯当たりの数値を当該月の世帯人数で除して算出。

## 推定期末在庫・推定出回り量

2月の推定期末在庫は、13万3085トン（前年同月比3.1%増）と前年同月をやや上回った（図4）。このうち、国産品は1万125トン（同11.5%減）と前年同月をかなり大きく下回った一方、在庫の大半を占める輸入品は12万2960トン（同4.5%増）と前年同月をやや上回った。

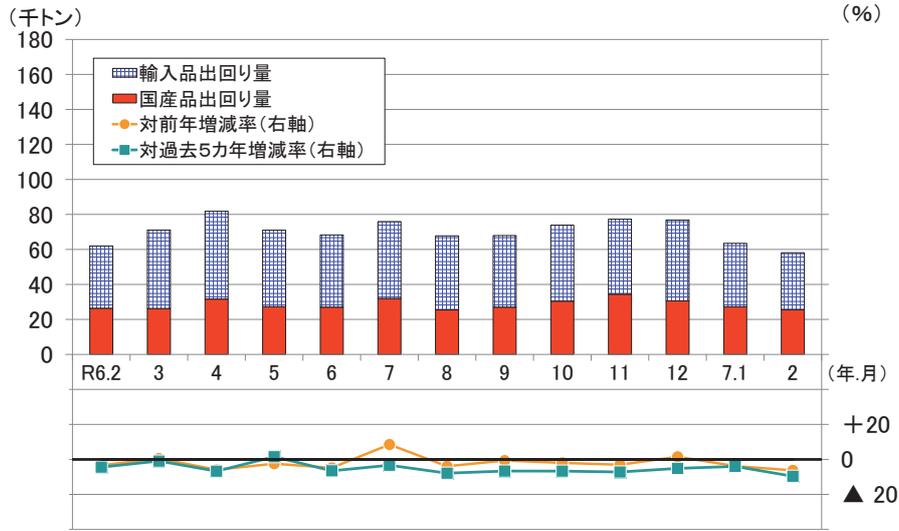
推定出回り量は、5万8094トン（同6.3%減）と前年同月をかなりの程度下回った（図5）。このうち、国産品は2万5602トン（同3.0%減）とやや、輸入品は3万2493トン（同8.7%減）とかなりの程度、いずれも前年同月を下回った。

図4 牛肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図5 牛肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

(畜産振興部 丸吉 裕子)

## 豚 肉

### 7年2月の豚肉生産量、前年同月比6.4%減

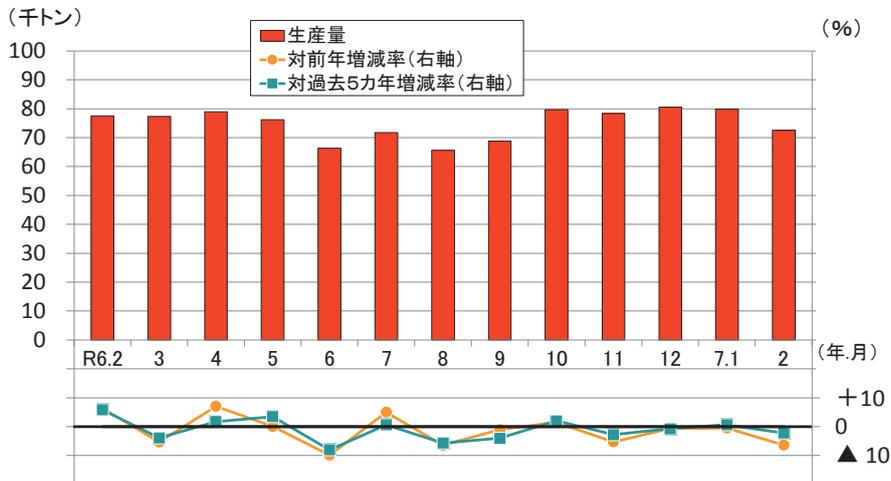
#### 生産量

令和7年2月の豚肉生産量は、7万2607トン（前年同月比6.4%減）と前年同月を

かなりの程度下回った（図1）。

なお、過去5カ年の2月の平均生産量との比較でも、2.2%減とわずかに下回る結果となった。

図1 豚肉生産量の推移



資料：農林水産省「食肉流通統計」  
注：部分肉ベース。

## 輸入量

2月の輸入量について、冷蔵品は、入船遅れなどの影響により主要輸入先である米国産、カナダ産およびメキシコ産輸入量が減少したことなどから、2万7609トン（前年同月比14.6%減）と前年同月をかなり大きく下回った（図2）。冷凍品は、紅海周辺の情勢悪化による物流の混乱などにより前年2月のスペイン産輸入量が少なかったことや、価格優位性のあるブラジル産輸入量が増加した

ことなどから、4万4294トン（同37.7%増）と前年同月を大幅に上回った（図3）。この結果、輸入量の合計<sup>（注1）</sup>では、7万1911トン（同11.4%増）と前年同月をかなり大きく上回った。

なお、過去5カ年の2月の平均輸入量との比較では、冷蔵品は16.3%減と大幅に下回った一方、冷凍品は27.4%増と大幅に上回る結果となった。

（注1）輸入量の合計は、くず肉を含む。

図2 冷蔵豚肉輸入量の推移

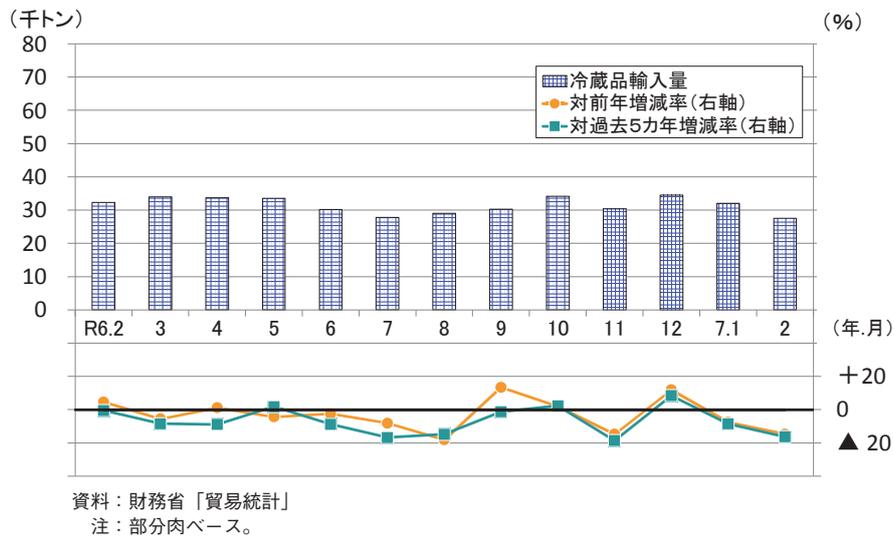
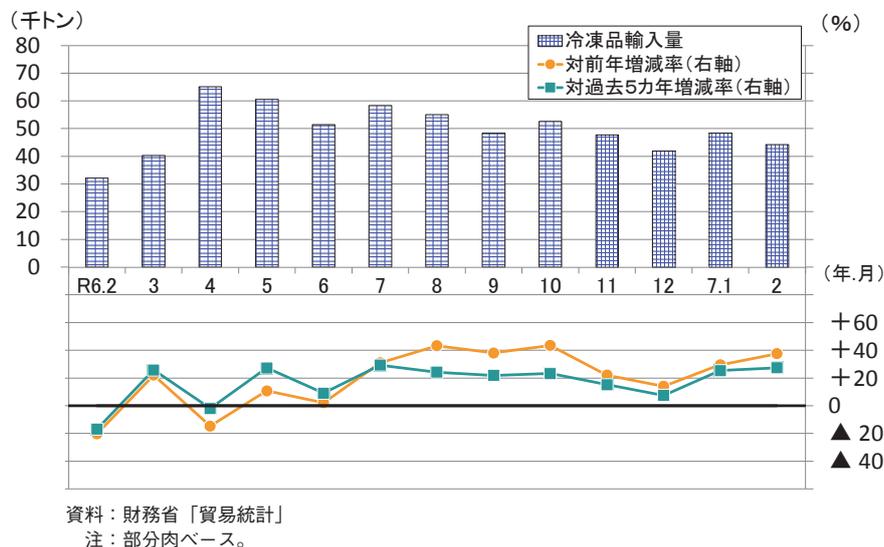


図3 冷凍豚肉輸入量の推移



## 家計消費量

2月の豚肉の家計消費量（全国1人当たり）<sup>(注2)</sup>は、598グラム（前年同月比8.2%減）と前年同月をかなりの程度下回った（総務省「家計調査」）。

なお、過去5カ年の2月の平均消費量との比較でも、4.4%減とやや下回る結果となった。

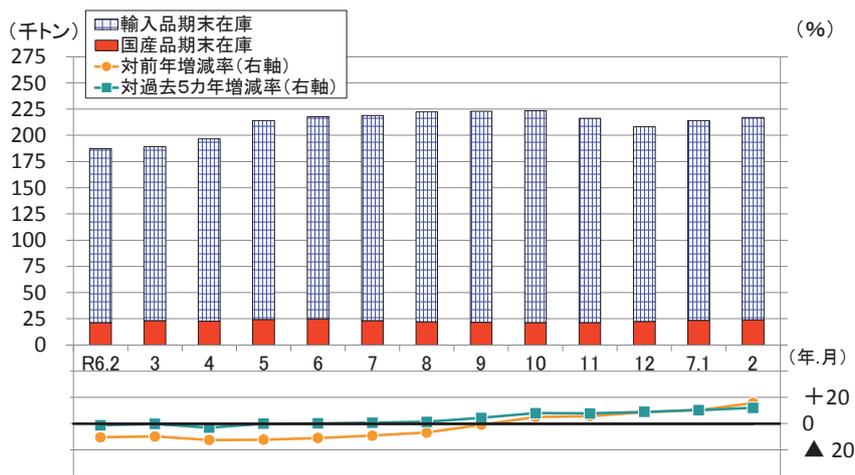
(注2) 1世帯当たりの数値を当該月の世帯人数で除して算出。

## 推定期末在庫・推定出回り量

2月の推定期末在庫は、21万6940トン（前年同月比15.9%増）と前年同月をかなり大きく上回った(図4)。このうち、輸入品は、19万2819トン（同16.4%増）と前年同月を大幅に上回った。

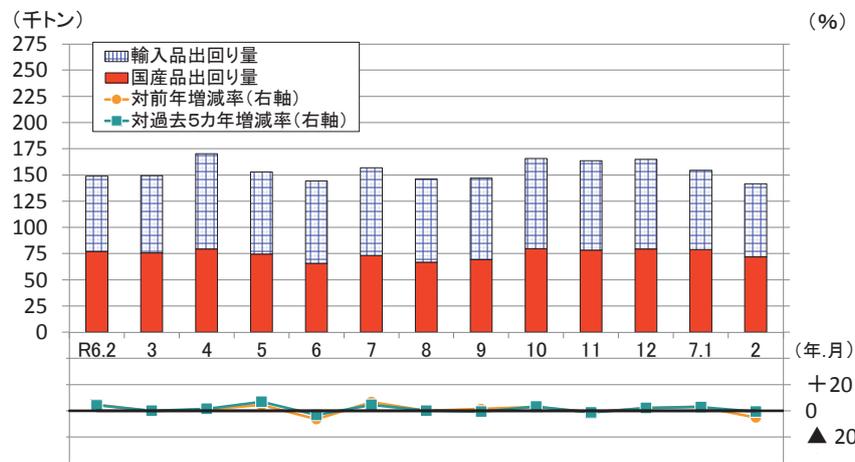
推定出回り量は、14万1484トン（同5.0%減）と前年同月をやや下回った（図5）。このうち、国産品は6万9600トン（同3.4%減）とやや、輸入品は7万1884トン（同6.5%減）とかなりの程度、いずれも前年同月を下回った。

図4 豚肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図5 豚肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

(畜産振興部 小森 香穂)

# 鶏肉

## 7年2月の鶏肉生産量、前年同月比5.4%減

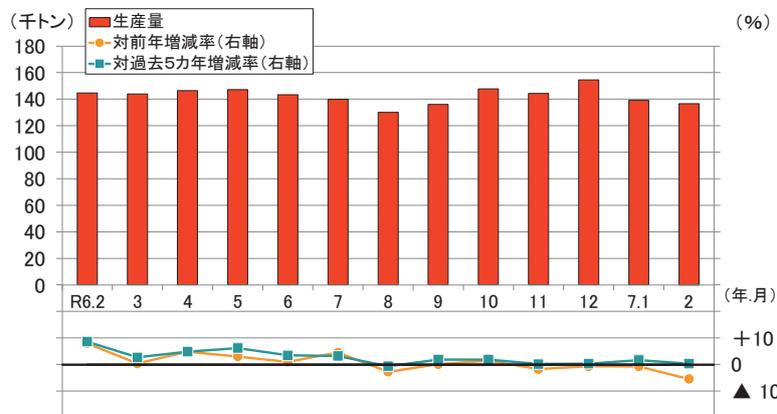
### 生産量

令和7年2月の鶏肉生産量は、13万6695トン（前年同月比5.4%減）と前年同月をやや

下回った（図1）。

なお、過去5カ年の2月の平均生産量との比較では、0.4%増とわずかに上回る結果となった。

図1 鶏肉生産量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ  
注1：骨付き肉ベース。  
注2：成鶏肉を含む。

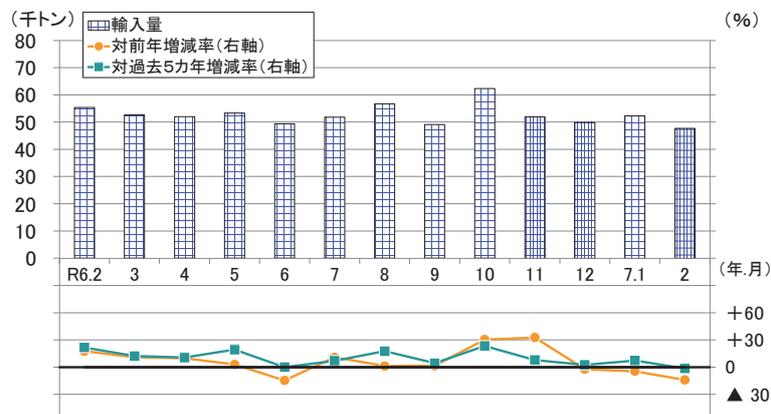
### 輸入量

2月の輸入量は、国内の節約志向を背景とした鶏肉需要により安定的に推移する中、前年同月のブラジル産輸入量が多かったことなどから、4万7961トン（前年同月比13.9%

減）と前年同月をかなり大きく下回った（図2）。

なお、過去5カ年の2月の平均輸入量との比較でも、1.3%減とわずかに下回る結果となった。

図2 鶏肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」  
注：鶏肉以外の家きん肉を含まない。

## 家計消費量

2月の鶏肉の家計消費量(全国1人当たり)<sup>(注)</sup>は、520グラム(前年同月比5.0%減)と前年同月をやや下回った(総務省「家計調査」)。

なお、過去5カ年の2月の平均消費量との比較では、4.1%増とやや上回る結果となった。

(注) 1世帯当たりの数値を当該月の世帯人数で除して算出。

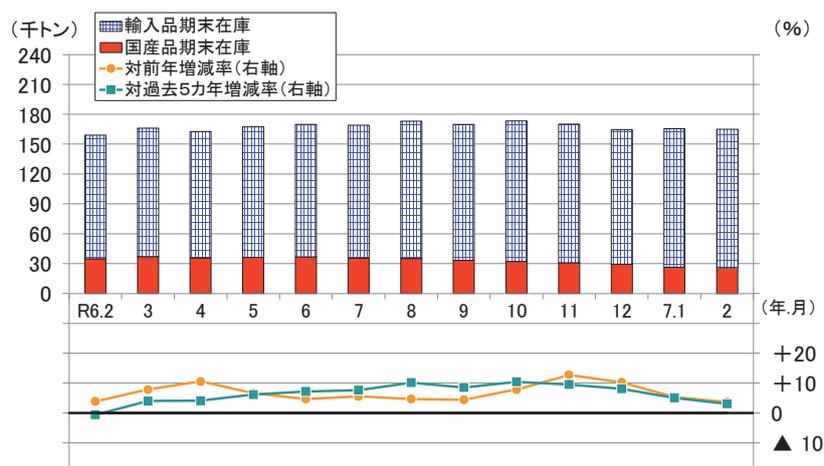
## 推定期末在庫・推定出回り量

2月の推定期末在庫は、16万4934トン

(前年同月比3.7%増)と前年同月をやや上回った(図3)。このうち、輸入品は13万9214トン(同12.1%増)と前年同月をかなり大きく上回った。

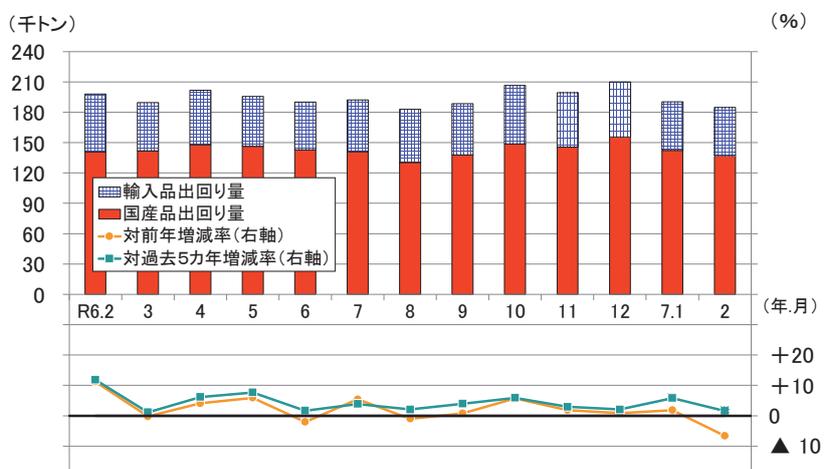
推定出回り量は、18万4864トン(同6.6%減)と前年同月をかなりの程度下回った(図4)。このうち、国産品は13万7233トン(同2.6%減)とわずかに、輸入品は4万7631トン(同16.6%減)と大幅に、いずれも前年同月を下回った。

図3 鶏肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図4 鶏肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

(畜産振興部 越川 紗弥)

# 牛乳・乳製品

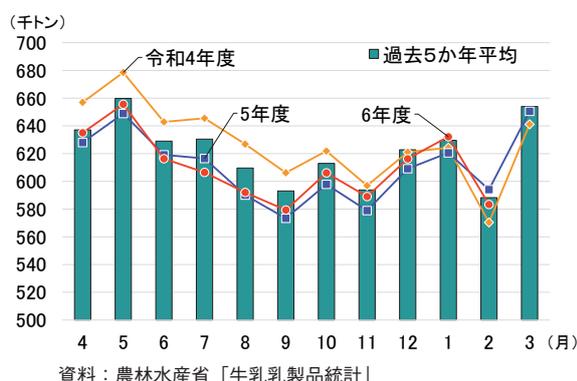
## 7年2月の全国の生乳生産量、7カ月ぶりに前年同月を下回るも、うるう年修正では実質増加

### 北海道の生乳生産量、前年並みにとどまる

令和7年2月の生乳生産量は、58万3333トン（前年同月比1.8%減）と7カ月ぶりに前年同月を下回った（図1）。地域別では、北海道が33万6531トン（同0.3%増）となり、7カ月連続で前年同月を上回るも、当月は前年並みにとどまった。また、都府県では24万6802トン（同4.6%減）と、8カ月連続で前年割れとなり、特に当月は減少率が拡大した。

前年がうるう年であったため、統計上は総じて減少傾向にあったが、前年同月を28日間として試算すると、本年2月の前年同月比は、全国が1.7%増、北海道が3.9%増となった。都府県では1.1%減となったが、減少率は縮小した。

図1 生乳生産量の推移



2月の生乳処理量を見ても、牛乳等向けは29万2829トン（同2.4%減）と、5カ月ぶりに前年同月を下回った。このうち、業務用向けについては2万3714トン（同

1.7%減）と3カ月連続で前年同月を下回った。

乳製品向けは28万6972トン（同1.1%減）とわずかに減少し、7カ月ぶりに下回った。これを品目別に見ると、クリーム向けは5万6324トン（同3.1%減）とやや下回り、チーズ向けは3万5140トン（同2.0%減）と2カ月連続で下回った。一方、脱脂粉乳・バター等向けは、15万3542トン（同0.2%増）と前年同月並みとなった（農畜産業振興機構調べ「交付対象事業者別の販売生乳数量等」）。

しかしながら、生乳生産量と同様に、前年同月を28日間として試算すると、本年2月の前年同月比は、牛乳等向けが1.1%増、業務用向けで1.9%増となった。また、乳製品向けでは、クリーム向けが0.3%増、チーズ向けが1.5%増、脱脂粉乳・バター等向けで3.8%増となり、乳製品全体でも2.5%増となった。

### 全国の牛乳生産量、5カ月ぶりに前年同月を下回る

2月の牛乳等生産量を見ると、飲用牛乳等のうち牛乳は、23万7021キロリットル（前年同月比2.1%減）と5カ月ぶりに前年同月を下回った。一方、成分調整牛乳は前年割れが継続しており、1万5607キロリットル（同9.2%減）とかなりの程度下回った。加工乳については、1万1722キロリットル（同0.4%増）と2カ月連続上回った。また、はっ酵乳は7万9906キロリットル（同3.4%増）と8カ月連続上回った。

牛乳等生産量についても前年同月を28日

間として試算すると、本年2月の前年同月比は、牛乳が1.4%増、加工乳が4.0%増、はっ酵乳が7.1%増となった。また、成分調整牛乳は5.9%減となり、減少率は縮小した。

## 2月のバター在庫量、前年同月比11.5%増

2月のバターの生産量は6262トン（前年同月比0.4%減）と、わずかながらも7カ月ぶりに前年同月を下回った（図2）。出回り量は6933トン（同3.1%減）と前年同月を2カ月連続下回った（農畜産業振興機構調べ）。2月末の在庫量について、2万5899トン（同11.5%増）となり、6カ月連続前年同月を上回った（図3）。

なお、生産量について、前年同月を28日

図2 バターの生産量の推移

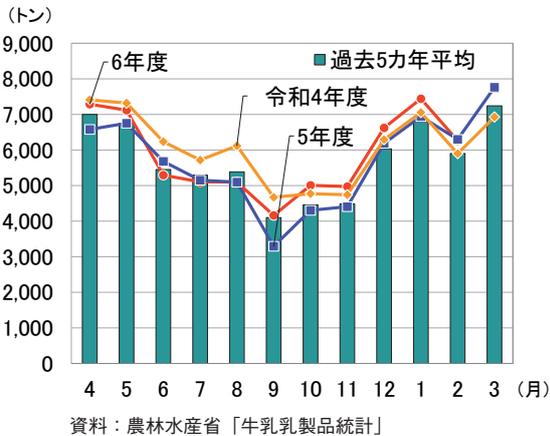
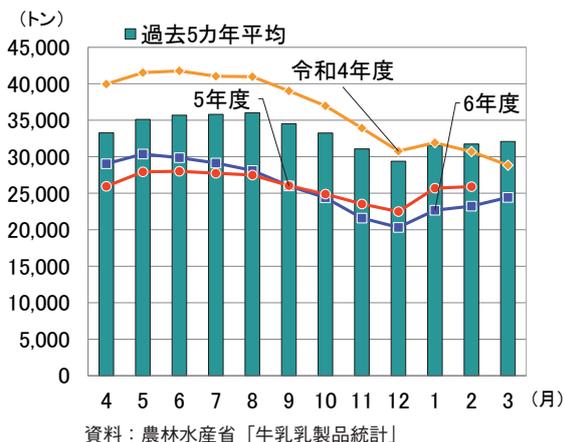


図3 バターの在庫量の推移



間として試算すると、本年2月の前年同月比は3.1%増となった。

## 2月の脱脂粉乳生産量、前年同月比0.5%減

2月の脱脂粉乳の生産量は、1万3179トン（前年同月比0.5%減）と前年同月からわずかに減少し、バター同様、7カ月ぶりに下回った（図4）。一方、出回り量は1万2248トン（同12.2%減）とかなり大きく下回った（農畜産業振興機構調べ）。在庫量は、在庫低減対策の効果により、令和4年10月以降前年同月を下回って推移していたが、6年12月に増加に転じ、2月末は5万3853トン（同4.0%増）と、3カ月連続で積み増された（図5）。

図4 脱脂粉乳の生産量の推移

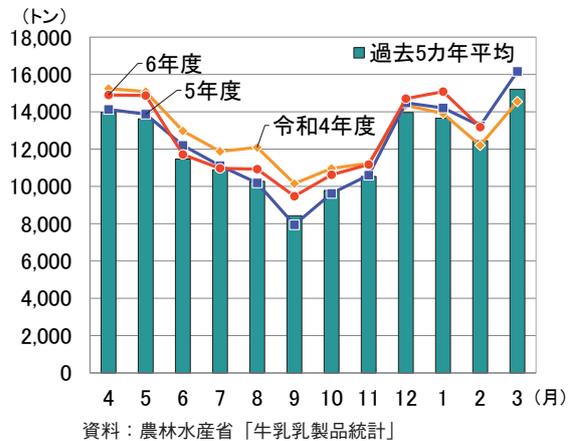
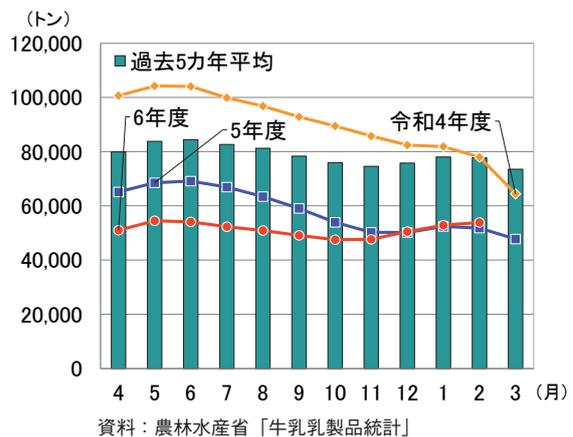


図5 脱脂粉乳の在庫量の推移

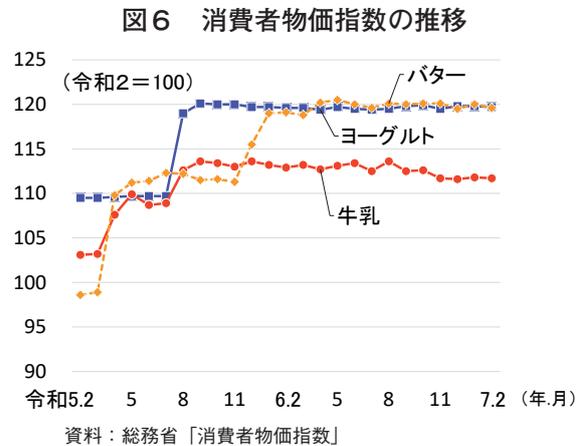


なお、生産量について、前年同月を28日間として試算すると、本来2月の前年同月比は3.0%増となった。

## 2月のバターの消費者物価指数、前年同月比0.4%上昇

総務省が令和7年3月21日に発表した2月の消費者物価指数（令和2年＝100）によると、牛乳は119.7（前年同月比0.0%上昇）と前年同月並みとなった（図6）。ヨーグルトは111.7（同1.1%低下）とわずかに下回り、バターは119.6（同0.4%上昇）とわずかに上回った。それぞれ、5年8月の飲用向けおよびはっ酵乳向け乳価の引き上げ、4月と12月の加工用向け乳価の引き上げに

伴う価格改定の影響が落ち着き、ほぼ横ばいで推移した。



（酪農乳業部 天野 明日香）

# 鶏 卵

## 7年3月の鶏卵卸売価格、前年同月比55.0%高

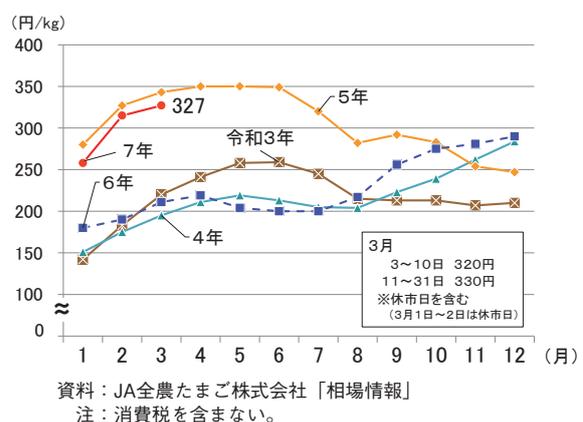
### 卸売価格

令和7年3月の鶏卵卸売価格（東京、M玉基準値）は、1キログラム当たり327円（前年同月差116円高、前年同月比55.0%高）と、前月から同12円上昇し、前年同月の同価格を大幅に上回った（図）。同価格の日ごとの推移を見ると、月初の同320円から11日には同330円に上昇し、月間の上昇幅は同10円となった。なお、過去5カ年の3月の平均卸売価格との比較でも、40.3%高と大幅に上回る結果となった。

供給面を見ると、生産量は、6年10月以降に発生した高病原性鳥インフルエンザ（HPAI）の影響を受けて、不安定な状況が

続いている。一方、需要面を見ると、量販店の一部において店頭価格の引き上げによる不振が見られたものの、HPAIの影響による供給不安から、業務用向けも含めて引き合いが強い状況にある。

図 鶏卵卸売価格（東京、M玉）の推移



## 家計消費量

2月の鶏卵の家計消費量（全国1人当たり）<sup>(注)</sup>は、860グラム（前年同月比3.4%減）と前年同月をやや下回った（総務省「家計調査」）。

なお、過去5カ年の2月の平均消費量との

比較でも、4.0%減とやや下回る結果となった。

（注）1世帯当たりの数値を当該月の世帯人数で除して算出。

（畜産振興部 越川 紗弥）

# 令和6年(1～12月)の食肉の家計消費動向

## 外食・中食需要は堅調に推移するも、物価上昇の影響が顕著

令和6年は、5年5月に新型コロナウイルス感染症（COVID－19）が5類感染症に移行してから1年が経過し、外食需要・中食<sup>(注)</sup>需要ともに堅調に推移したものの、物価の上昇による影響が顕著となった。

（注）店舗で購入して家に持ち帰り、食事すること。また、その食品のこと。

一般社団法人日本フードサービス協会の「外食産業市場動向調査（令和6年（2024年））年間結果報告」によると、6年の業界

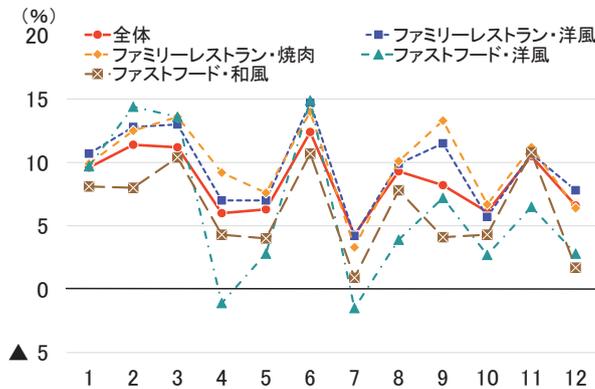
全体の売上高は、原材料費の高騰などに起因した価格改定による客単価の上昇や年間を通じたインバウンド需要の増加などにより、全店ベースで前年比8.4%増となり、過去最高だった元年を上回った。

業態別に見ると、「ファミリーレストラン」（前年比9.5%増）、「ファストフード」（同8.1%増）など、すべての業態で前年を上回る売り上げとなった（図1）。

日本チェーンストア協会の「チェーンストア販売統計」によると、6年の総販売額は13兆308億円（同2.7%増）となった。

カテゴリー別に見ると、「食料品」（同4.4%増）およびその内数である「畜産品」（同

図1 令和6年における外食産業の業態別売上高の推移（前年同月比）

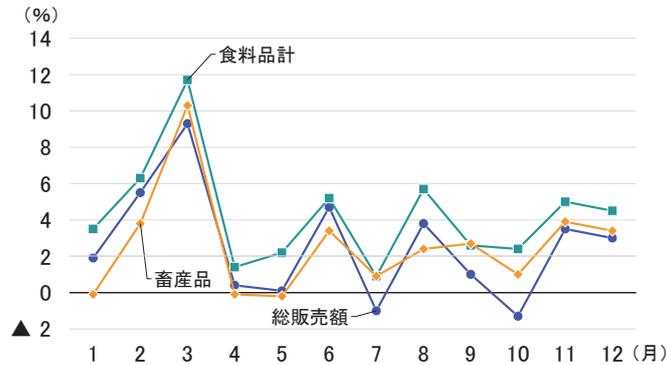


資料：一般社団法人日本フードサービス協会「外食産業市場動向調査」  
注1：消費税を含まない。  
注2：既存店ベース。

2.7%増)、「住関連品」(同4.4%増)はいずれも前年を上回った一方、「衣料品」(同5.4%減)は前年を下回った。「食料品」は、期間

を通して節約志向から買上点数の減少傾向が続いたが、店頭価格の上昇や農産品の相場高により売上額は伸びた(図2)。

図2 令和6年におけるチェーンストアの部門別売上高の推移(前年同月比)



資料：日本チェーンストア協会「チェーンストア販売統計」  
注：店舗調整後。

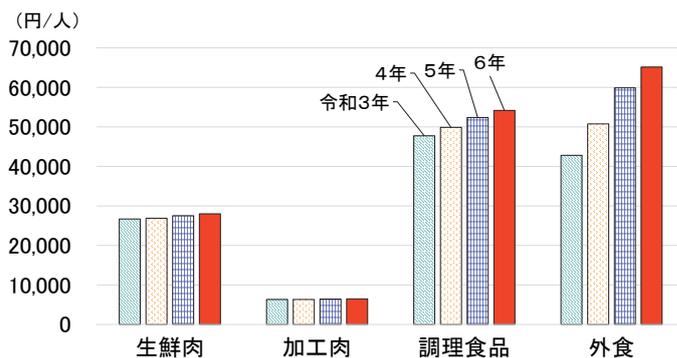
### 食肉の購入数量、鶏肉が前年を上回る

総務省の「家計調査」によると、令和6年の家計消費(全国1人当たり)<sup>(注)</sup>は、「生鮮肉」が2万8006円(前年比1.8%増)、「加工肉」が6482円(同0.8%増)、「調理食品」が

5万4159円(同3.4%増)、「外食」が6万5138円(同8.8%増)と、いずれも前年を上回った(図3)。

(注) 1世帯当たりの数値を当該年の世帯人数で除して算出。

図3 品目別の家計消費(購入金額)の推移

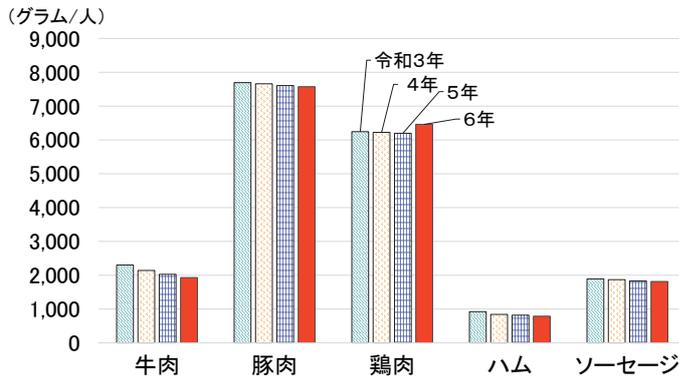


資料：総務省「家計調査」  
注1：1世帯当たりの数値を当該年の世帯人数で除して算出。  
注2：消費税を含む。  
注3：贈答用など自家消費以外のものを含む。

6年の食肉の購入数量を畜種ごとに見ると、「牛肉」は1930グラム(同4.7%減)、「豚肉」は7573グラム(同0.5%減)といずれも前年を下回った一方、「鶏肉」は6462

グラム(同4.3%増)と前年を上回った(図4)。食肉加工品は、「ハム」が788グラム(同3.8%減)、「ソーセージ」が1814グラム(同0.9%減)と、いずれも前年を下回った。

図4 食肉の種類別の家計消費（購入数量）の推移



資料：総務省「家計調査」  
 注1：1世帯当たりの数値を当該年の世帯人数で除して算出。  
 注2：贈答用など自家消費以外のものを含む。

### 牛肉：豚肉、鶏肉への需要シフトが強まる

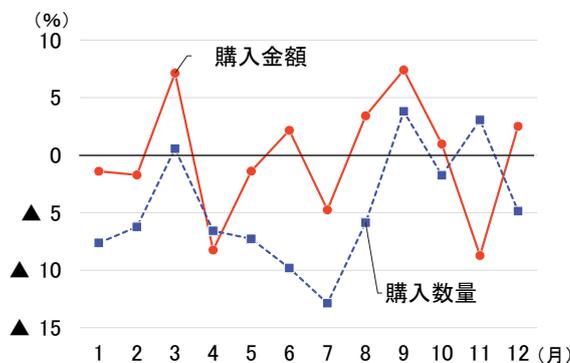
牛肉の消費構成は、家計消費が減少する一方、外食・中食への仕向け量が拡大する傾向にあり、近年は、外食・中食での消費が全体の消費量の約6割、家計消費が約3割で推移している。

牛肉の令和6年の家計消費（全国1人当たり）を見ると、購入金額は、年の半分が前年を下回って推移し、購入数量も3月、9月、11月を除き前年を下回って推移した（図5）。

前年と比較すると、購入金額、購入数量ともに減少した。

一般社団法人全国スーパーマーケット協会の「スーパーマーケット白書（2025年版）」（以下「スーパー白書」という）によると、3月はひな祭りや卒業シーズンなどハレの日用の国産牛肉、8月は夏休み、お盆時期で、9月は三連休（敬老の日や秋分の日など）が続き、需要が回復した店舗が見られたものの、1年を通して、牛肉から豚肉、鶏肉へ需要がシフトする傾向が強まった。

図5 令和6年における牛肉の家計消費の推移（全国1人当たり、前年同月比）



資料：総務省「家計調査」  
 注1：購入数量および購入金額は1世帯当たりの数値を当該月の世帯人数で除して算出。  
 注2：消費税を含む。  
 注3：贈答用など自家消費以外のものも含む。

## 豚肉：牛肉からの需要シフトの他、相場高などにより購入金額は増加

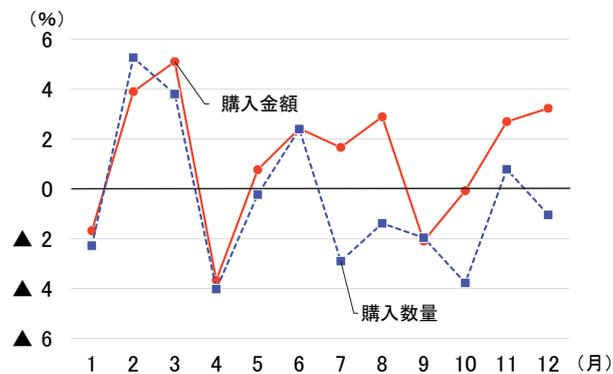
豚肉の消費構成は、最大の仕向け先である家計消費が全体の消費量の約6割を占めている他、加工仕向けおよび外食・中食で約4割を占めている。

豚肉の令和6年の家計消費（全国1人当たり）を見ると、購入金額は、年の半分以上が前年を上回った一方、購入数量は年の半分

以上が前年を下回った（図6）。前年と比較すると、購入金額は増加したものの、購入数量は減少した。

スーパー白書によると、牛肉から需要がシフトする流れが継続し、小間切れやひき肉など普段使いの商材を中心に売上が回復したものの、4月以降は相場高により値頃な商材以外の動きが鈍くなった。11月以降は気温低下に伴い鍋需要が高まり、スライスやしゃぶしゃぶ用の国産豚肉に回復傾向が見られた。

図6 令和6年における豚肉の家計消費の推移（全国1人当たり、前年同月比）



資料：総務省「家計調査」

注1：購入数量および購入金額は1世帯当たりの数値を当該月の世帯人数で除して算出。

注2：消費税を含む。

注3：贈答用など自家消費以外のものも含む。

## 鶏肉：節約志向により購入金額、購入数量ともに増加

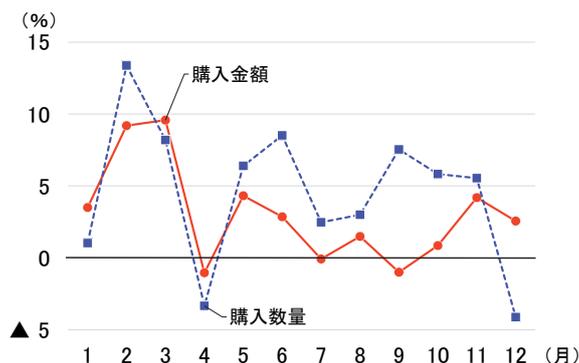
鶏肉の消費構成は、最大の仕向け先である外食・中食での消費が全体の消費量の約5割、家計消費および加工仕向けが約5割となっている。

鶏肉の令和6年の家計消費（全国1人当たり）を見ると、購入金額は4月、7月、9月

を除き前年を上回り、購入数量は4月、12月を除き前年を上回って推移した（図7）。前年と比較すると、購入金額、購入数量ともに増加した。

スーパー白書によると、前年のHPAIからの反動もあり、相場がおおむね安定して推移した他、牛肉、豚肉の相場高により、価格が安定して値頃感のある鶏肉への需要シフトが顕著となった。

図7 令和6年における鶏肉の家計消費の推移（全国1人当たり、前年同月比）



資料：総務省「家計調査」

注1：購入数量および購入金額は1世帯当たりの数値を当該月の世帯人数で除して算出。

注2：消費税を含む。

注3：贈答用など自家消費以外のものも含む。

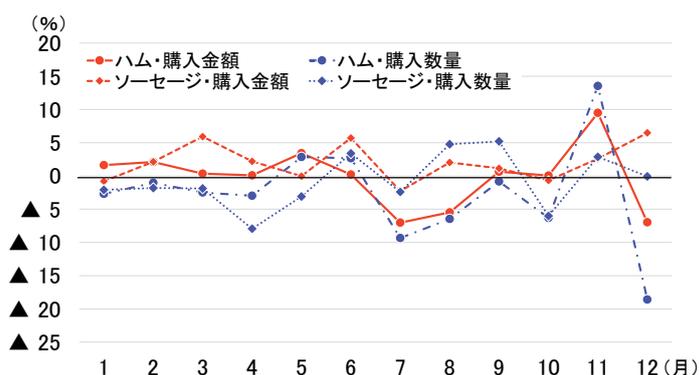
### ハム・ソーセージ：値上げの影響などにより購入金額、購入数量ともに減少

ハムおよびソーセージの令和6年の家計消費（全国1人当たり）を見ると、ハムの購入金額は、7月、8月、12月を除き前年を上回って推移した一方、購入数量が前年を上回ったのは5月、6月および11月のみであった。

ソーセージは、購入金額が1月、7月および10月を除き前年を上回って推移した一方、購入数量が前年を上回ったのは6月、8月、9月、11月のみであった（図8）。

スーパー白書によると、ハムなどの加工肉は、値上げの影響でおおむね年間を通じて動きが鈍かった。

図8 令和6年におけるハムおよびソーセージの家計消費の推移（全国1人当たり、前年同月比）



資料：総務省「家計調査」

注1：購入数量および購入金額は1世帯当たりの数値を当該月の世帯人数で除して算出。

注2：消費税を含む。

注3：贈答用など自家消費以外のものも含む。

（畜産振興部 丸吉 裕子）